
ライトニングソード

森田 ミヤジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライトニングソード

【Nコード】

N3002G

【作者名】

森田 ミヤジ

【あらすじ】

あれはなんだ。あの美しく光り輝いているものはなんだというのだ。どう見ても金閣寺ではないぞ。あれはポルロンソ。さあ、決める必殺のガッツポーズを！

序章〈プロローグ〉

まだ肌寒い朝霧の中を疾走する、一騎の駿馬。

それに跨っているのはアルザクス王国の騎士、サイト・ローランドだった。

まだあどけなさの残るその横顔はまさに十六歳の少年のものだが、手綱を器用に捌く身のこなしは、よく訓練された熟練の兵士のものであった。

(雲をつかむような話だ……)

サイトは口の中でそう呟いた。

史上最年少の王国騎士。

彼に与えられた栄えある初任務は、『ポルロンソ』を捜し出すことだった。

ポルロンソ……それは五年前、世界を侵略せんと人間界に宣戦布告をした魔王『ゴツテム』を一夜にして屠った男の名前である。

真の勇者。救世主。最強のカリスマ。美の男神。

呼び名は様々あれど、やはりそれは子供が御伽噺に聞かされる英雄物語の域を出ないものばかりであった。

魔王を倒してしまった後は、ぷつぷつと消息を絶ってしまったことも、その存在を神格化する一端となっている。

もはや過去の栄光、逸話となった魔王討伐の神話は、完全な寝物語だと冷笑するものも多くなってきた。

だが、サイトの胸には未だに少年ならではの英雄への憧憬と冒険心が居住している。

もしも英雄が実在するのであれば……

(ぜひ、お会いしてみたい……)

と思うのは、当然であった。

実在への期待と虚構への不安。

それらがなймаぜになった複雑な心境の中で、サイトはポルロンソ
搜索を行っていたのであった。

英雄をさがして

バーシンドム山、中腹。

「ここにポルロンソさんが……」

サイトはあらためてその山小屋を見た。

質素ではあるが、みすばらしくないたたずまい。

小屋の脇に規則正しく積まれた薪は、住人の性格を反映しているかのようにだった。

ひよいと屋根から突き出した煙突からは、細い煙が静かにたなびいている。

間違いなく、今、『彼』が小屋の中に居るのだ。

かつてない期待感が、サイトの胸を熱くした。

ポルロンソの所在を知ることができたのは全くの偶然だった。

それは国へ定期報告の手紙を送るために、羊皮紙を買いに入った雑貨屋での出来事である。

薄暗い店内は、埃をかぶっている商品を隠すのには好都合だった。ただ

店の主人は頬杖をついたまま、どっぷりと眠りの世界へ浸りこんでいた。

「……」

サイトは苦々しげに微笑んだ。

彼はこういったのんびりとした空気が嫌いではない。

騎士だからといってあれこれとやたらに値の張る商品を薦められる

こともない。

なによりも、店番が居眠りできるのは世の中が平穏な証拠だ。

（しかし、その平穏も長くは続かない……暗黒の時代が再び訪れようとしているのだから）

自分に言い聞かせるようにして、サイトは商品の棚に目をやった。羊皮紙とインク。

それらを手に取り、居眠りをしている店主のもとへ歩く途中で、サイトは綺麗な琥珀色の液体の入った瓶を見つけた。

何気なくそれも手に取って見る。それは蜂蜜だった。

（美味しそうだなあ）

サイトは根っからの甘党で、よくそれを騎士団の中でも笑い話の種にされる。

それでも今は、重要な任務を帯びての道中であつたため、なかなか甘いものを口にするゆとりなどはなかった。

（久しぶりに、甘いものでも食べたいな。トーストにたっぷり塗るとすごく美味しい）

ためつすがめつ、蜂蜜の瓶を見つめ回す。

すると、蟻で固めた木栓の蓋に、生産者の名前が焼き印で押されているのを見つけた。

（ポ……ル……ロ……ン……ン……）

「ポルロンソ！」

サイトは思わず叫んだ。

ポルロンソという名前はそうあるものではないのだ。

「主人！」

サイトは慌てて、店主の肩をゆすって起こした。

「ふあ、はん？」

「主人！これは……！」

「あー、蜂蜜は300カルクだよ。ビター文まからねえよ」

「そうじゃない！これを作ったのは……」

「ポルロンソさんだよ。300カルクだ」

「ポルロンソというと、あの！」

「そう、あのポルロンソ印だから極上の蜂蜜だよ」

「五年前にゴツデムを倒したポルロンソ？」

「そう、ゴツデムさんも虜になった蜂蜜。300カルクは安いだろ？」

「どこに行けば会えますか！？」

「300カルク払えば、もうあんたのもんだよ」

それからしばらくの間、かみ合わない問答を続けて、サイトが300カルクを払ったところでようやく店主はポルロンソの居場所を教えしてくれたのである。

そうして、夜通し馬を飛ばして、この地へ辿りついた。

手の平に汗がにじむ。

これは、伝説との対面なのである。

(……よし！)

意を決して、サイトはドアの前に立った。

美神降臨

ドアの前に立ち、息を吸う。

朝の山の新鮮な空気が、肺に流れ込んできた。

「ポルロンソさん、いらっしやいますか」

少し上ずった声が出た。

サイトはそれを誤魔化すために、言ってから一つ、咳払いをする。

「アルザクス国から参りました。ぜひ、お顔をお見せくださいませんか」

「ドアはあいているよ。入ってきたまえ」

中から、声が返ってきた。

それはサイトが想像していたよりも、とても優しげなもので、「伝説の英雄」という堅苦しい印象をいくらか軟化させる響きを持っていた。

サイトの胸に、大きな期待感が込み上げ、弾けそうになる。

「し、失礼します！」

サイトはドアの取っ手をつかんだ。

そのひんやりとした重たい感触は、幾分か、彼の心を落ち着けてくれた。

そして、サイトはここへやって来た目的を頭の中で反芻する。

落ち着け、サイト。ここへは、ミィハー気分で来たんじゃない

世界の命運がお前にかかっているぞ。浮かれて失敗するな！

そう自分に言い聞かせて、いざ、取っ手を回そうとした時。

ガチャリ……

突然、ドアが開いた。

中から、開けられたのだ。

「わ、わぁっ！」

サイトはびっくりして、後ずさった。

「おおっと！」

相手も少し驚いて、声を上げた。

「ああ、すまない、びっくりさせてしまったようだね。なかなか入ってこないものだから、心配になってしまったよ」

そう言っ出てきたのは、眼鏡をかけ、上等そうな黒のシャツを着た、長身の男だった。

サイトは男を見て、息を呑んだ。

その姿はこの世のものとは思われないほどの美しさだった。

引き締まった眉、高い鼻筋。

長いまつ毛も物憂げな、赤銅色の瞳。

流れるような銀髪は腰まで届くほど長く、そして、艶やかであった。体つきも、しなやかではあるが、決して貧弱ではない。

おそらくは、高名な芸術家を千人集めて彫像を作らせたとしても、この美しさを表現できる者は一人もいないだろう。

(なんて……なんていう美しさなんだ！)

その輝きに見とれながら、サイトは確信した。

(ポルロンソ……この人が本物のポルロンソさんだ……)
「早いんだね」

先に声をかけたのはポルロンソの方だった。
サイトも慌てて応じる。

「お、おはようございます、ポルロンソさん」

「おはよう。ええと……」

「サイトです。サイト・ローランドと申します」

「よろしく頼むよ、サイト君」

ポルロンソが手を差し出してきたので、サイトもそれを握った。

(大きい手だなあ)

彼の力強さと親しみやすさが、手の平を通して伝わってくるようだった。

ポルロンソは優しい笑みを浮かべていたが、何かに思いつくと、パチンと指を鳴らした。

「そうか、君がこのあいだ、お中元をくれた人かね」

「は？」

「ベーコン、美味かったよ。ありがとう」

「あ、あの、ちがいます」

「何！あれはベーコンではなかったのか……失礼したね」

「そうではなくて……」

「ハム？」

「あの、お中元の話ではないんです」

「うん？あれは君ではないのか」

「違います」

「しかし、では、いったい誰が？」

「し、知りません」

「そりゃあ、そうだね！」

ポルロンソはもう一度パチンと指を鳴らし、家の中へと引き返して行った。

「？」

ポルロンソはすぐに戻ってきた。肩には、麻縄を口に括りつけてある大きな瓶を下げている。

「さあ行くぞ、サイト君」

「え？」

「早くしなければ、日が昇りきってしまうからね」

「ど、どこへ行くんです？」

「蜂の巣箱だよ」

ポルロンソはそう言うと、まだ朝霧に煙る山をスイスイと登って行ってしまった。

サイトも慌ててその後を追う。

山の端からは暁が顔をのぞかせ、世界を光で照らし始めていた。

食す男たち

労働の後にはそれに見合う対価が用意されて然るべきである。

サイトは頭の片隅で、父の言葉を思い出した。

彼は今、山の麓の大衆食堂にポルロンソと二人でいた。

店内は朝一番で伐採や採掘といった山仕事を終えてきたであろうが、つしりとした体格の大男たちでごった返していて、香ばしい揚げパンの香りは彼らの汗や凝脂の匂いに遮られ、サイトの鼻にはなかなか届かなかった。

それでもサイトは別段、不快さは感じなかった。

労働とは人間の美德であると、彼は信じているのだ。

朝一番でバーシンドム山の中腹にある菜の花畑へ案内されたサイトは、そこでポルロンソの仕事の手伝いをする事になった。

仕事というのは、もちろん蜂蜜の採集である。

ポルロンソは養蜂家という職業を大いに楽しんでいるように見えた。淡い緑と黄色い花で彩られた畑の中心に、整然と並べられた蜂の巣箱の前に立ち、何かに祈りを捧げるかのように一呼吸おいてから、彼は作業を開始した。

そのプロセスは非常に単純な繰り返しである。

蓋を開け、自然界の産物とはとても思われないような正六角形をいくつも敷き詰めた蜂の巣を持ちあげ、滴ってくる蜂蜜を掬い採る。蜂たちはもう完全にポルロンソに慣れきっているのか、彼の周りをつんづんと飛び回るだけで、威嚇も攻撃もしてこなかった。

手際よく、黙々と作業をこなすこと二十分足らずで三つの大瓶は琥珀色の液体でいっぱいになった。

それはバーシンドム山の端から顔を出した朝日に照らされて、陳腐な言い回しではあるがキラキラと宝石のように輝いていた。

「あ、僕、運びます」

「そうかね？うむ、ありがとう」

サイトは自分からその瓶を担ぐことを申し出て、ポルロンソもそれについて遠慮はせずに、彼に瓶を一つ預けた。

「う、結構、重たいですね」

「大丈夫かね？無理は禁物だ、サイトくん」

「平気です」

「手伝わせて悪いね、サイトくん。朝食はまだだろう？どうだね、うまい食堂が山の麓にある。これを小屋に置いたら行ってみるかね？」

サイトはたしかに腹ぺこだったので、すぐにその申し出を受けた。伝説の英雄とじっくり話をする時間がほしかったのも事実である。

何よりも、今回彼を探訪した理由を本人に聞いてもらわなければ意味がない。

時は無限ではないのだ。

混雑をかき分け、二人はなんとか空いている席を見つけ、そこに腰を落ち着けた。

店構えは汚いが、テーブルの上は綺麗に拭きあげられていたので、サイトは好感を持った。

（よし、ここで話をつけてしまおう）

決意とともにサイトはこぶしを握る。

それとは対照的に、ポルロンソは実にゆったりとした動作で、真っ

白のタオルを使って顔や首筋をきれいに拭っていた。
この男が使うと、粗末なタオルでも上等なハンカチーフのように見える。

「ここはトリ豆のスープが美味いんだ。君、豆は大丈夫かね？」

「あ、はい。むしろ好物ですよ」

「そう、よかった。ハイ、ヤーノ」

ポルロンソは混雑のなかでも良く透る声で、給仕の少年を呼んだ。少年はそれを聞くと、急いで水を汲んだコップを二つ持ってテーブルまで駆け寄ってきた。

身の丈から判断しておそらくは十歳かそこらだろう。

彼は着ている服こそ粗末だったが、瞳には利発そうな光を宿していて、テーブルにコップを置くときもサイトに軽く会釈をしてみせた。ポルロンソも気さくに声をかける。

「おはよう、ヤーノ」

「おはようございます、ポルロンソさん。誰かと一緒なのは珍しいですね」

「新しい友人のサイトくんだよ」

(え……)

サイトは英雄とも呼ばれるポルロンソに、『友人』と紹介されることに對してちよつとした気恥かしさを持った。

しかし、もう一方では、出会って間もない人間を友人と呼べてしまうポルロンソが非常に寛容で、物事に頓着しない器の大きさを持っていることも感じた。

このやり取りだけでも、彼が今までどのような土地で生きてきたかがわかる様な気がした。

おそらくは老若男女を問わず、誰にも分け隔てなく親しく接し、あ

らゆるところに友人や知人を作ってきたのだろう。

(でも、僕はそんなポルロンソさんの生活を壊してしまうかもしれない)

サイトは表情を曇らせた。

ここまでは全く失念していたが、ポルロンソにはポルロンソの生活があるのだ。

蜂蜜を採り、食堂で豆のスープをすすり、離れの山小屋で静かに暮らすのは、戦いを終えた英雄には実にふさわしい生き方にも思える。いくら世界の危機が迫っているとはいえ、この平和な生活を捨てさせ、命の危険を伴う旅に彼を無理やり連れ出すというのは実に気に入らなかつた。

(いやな任務だ……)

サイトは暗澹たる気持ちになった。

世界を救うという大義と、ポルロンソの日常を乱したくないという道徳心がサイトの中で大きな葛藤を巻き起こしていた。

だが、行動を起こさなければ、どうなってしまう？

そこには暗黒ともいえる未来が待ち受けているだろう。

魔王の復権は、世界の破滅に等しい事件なのだ。

この任務には、躊躇を差し挟む余地はない。

ましてや、個人の葛藤など取るに足らないものだ！

「サイトさん」

サイトの険しくなった顔を、ヤーノが下から覗き込んできた。

人見知りという言葉をまったく知らないような、あどけない笑みを浮かべている。

「え？ああ、何だい？」

「サイトさん、よろしく。ヤーノです」

「よろしく、ヤーノ。サイト・ローランドです」

ヤーノ少年の、実に礼儀正しい挨拶に、サイトは自分も思わず姿勢を正してしまった。

「ヤーノ。二人とも、いつものアレで頼むよ」

「トリ豆のスープですね」

「うむ。そうそう、サイト君は育ち盛りかね？」

「はい？」

「年はいくつ？」

「じゅ、十六です」

「では、追加でハムサンドも頼もう」

「とり豆のスープとハムサンドですね。わかりました」

「たのむよ」

「はい」

ヤーノはくるりと向きをかえて、パタパタと厨房へ駆けて行く。ポルロンソは実に優しい笑顔で、その後ろ姿を見送っていた。

「ヤーノは実に賢い子だね。一度会った人の顔と名前を忘れないという特技も持っているんだよ」

「ええっ、それは凄いかも……」

「将来が楽しみだね。彼は両親の食堂を継ぎたいと言っているんだが、彼なら学者にもなれるだろう」

「学者ですって！」

「学者はいいぞ、サイト君。王宮学芸員にもなれば三食昼寝付きで遊んで暮らせてしまうんだ。たまに興味のあることについて論文で

も書けばいいだけだね」

「うーん、でも、論文を書くこと自体が難しいような気がしますよ」
「私も昔、美味いキノコについての論文を書いたことがあるよ。採れる場所と季節、育て方や美味しい調理法でも載せて、表紙に『キノコ文書』と書けば立派な論文だ」

「そんなものですか？」

「やったもん勝ちの世界とも言えるね。君がもしも私以上のキノコ野郎だったら、もっと詳しく調べて『真・キノコ文書』を書くのもいいだろう」

話が盛り上がっていたところへ、素晴らしく良い香りのするスープが湯気とともに運ばれてきた。

「おまちとおさまです」

「出た。これだよ、サイトくん」

「本当にいい匂いだ！」

「さて、ではいただきますか。おっと、温かい食べ物を前に食前の祈りなどという野暮なことはやめてくれたまえ。食卓の神様は食べごろというものに厳格なのだよ」

二人はそこからしばらくの間、口もきかずにスープをすすり続けた。人間は真に美味しい物の前では無心になり、無口になるものだ。

途中で運ばれてきたハムサンドも二人はあっという間に手を伸ばして平らげてしまい、気がつけばスープもなんと三杯もお代わりをしていた。

すべてを食べ終えて落ち着いたところで、ハッと気づいて、さすがにサイトは赤面した。

「す、すいません。昨日の昼からそういえば何も食べていなかったんです」

「そうだろうね。一目見てわかってしまったよ」

「そんなにやつれてましたか？」

「私は食いしん坊だから、そういうところにも目ざといのさ。うむ、ちよつと失礼……」

清々しい笑顔で断りを入れてから、ポルロンソは左手で口元を隠し、爪楊枝で歯の隙間に挟まった肉や野菜の筋を取り除く作業に没入し始めた。

この男にかかると、そのような無作法ともいえる仕草も実に優美なものに見える。

紅石を埋め込んだような赤銅色の瞳は真剣な光をたたえながらじつと宙を見つめ、楊枝を操作する右手は同じ個所を二度も探るという無様なまねをしない、正確無比な、実に洗練された動きで素早く歯の隙間の異物を掻き出していく。

(さすがは、ポルロンソさんだ……)

この朝、サイトは同じ感嘆を十回は漏らしていた。

それほどまでに、ポルロンソという男は現実離れた美しさと強さ、神秘性を兼ね備えているということなのだ。

人か、獣か

食堂でお腹一杯食べてから外に出ると、すでに太陽は空高く昇っていた。

「サイトくん、時間があるなら私の小屋へ来ないか」

ポルロンソが大きく伸びをしながら言った。

「食後のティータイムにご招待だ。おっと、その前に少し散歩をして帰るとしよう。素晴らしい陽気だからね」

彼が白い歯を輝かせながら、実にさわやかにそう言うので、サイトは頷くほかなかった。

(なかなか、言い出せないなあ……)

サイトはポルロンソの背中について山道を歩きながら、ぼんやりと考えていた。

魔王復活の兆し、それに伴う魔人達の増長、魔物による被害の増加……目の前に広がる平和な景色などまるで嘘のように、世界は暗い話題ばかりを抱えている。

それらすべての解決策をまとめて束にして握っているのが目の前の男であり、気さくで、寛大で、はっとするほど美しいポルロンソ。彼は最高だ。

パーフェクトそのもの。

しかし、サイトにはどうしても、目の前の男と憧れつづけた英雄ポルロンソの姿がしっかりと合致しなかった。

そうして、抑えようとしても抑えきれない、ある疑念が彼の心にま

た大きな影を落とす。

『彼が本当に魔王を倒した《ポルロンソ》なのだろうか？』

そのことだ。

朝からずっと、その疑念がサイトの胸の中に渦巻いている。

噂では、ポルロンソは一切の武器を持たず、魔王ゴツデムと三日三晩にわたる壮絶な殴り合いを演じた挙句、『ライトニングソード』と呼ばれる技でとどめを刺したという。

それはまさに、鬼神のごとき戦いぶりだったとも聞いた。

しかし、野辺の花を踏まないように小刻みなステップを交えて歩くこの優しげな男はどうだろう？

命がけの殴り合いなどんでもない！

花一輪の命でさえ慈しみ、虫一匹の命をも尊重する偉大な人道主義者のように思われた。

あの壮絶な英雄譚は、魔王が突如として姿を消した事へのつじつまをなんとか合わせようとして創りだされた、どこかの吟遊詩人の勝手なお伽噺だったのではないかとさえ、今のサイトは考えていた。

いい加減な伝承が混ざり合って作り上げられたヒーロー像。

それが独り歩きしているのでは？

だとすれば、サイトは自らの良心に背くことなく、この任務を完了することができる。

いない人間は捜しようがないのだから！

(……………うん、僕はそれが最善だと思う)

このまま小屋へ向かい、そこでポルロンソ本人に真相を訊く。

ポルロンソは「参ったな、あれは根も葉もない作り話でこちらもい

「い迷惑なんだよ」と笑顔で語る。
それでこの探索は終わり。
彼とはいい友人になって、自分はアルザクスに戻る。
そうして、別の方法で魔王復活を阻止する手立てを考えるのだ。
必ず何か手はあるに違いない。

（ポルロンソさんも、今までどおりの生活。それが一番いい）
見通しが明るくなった気がした。

（我ながら単純だな……）

サイトが自嘲の笑みをこぼしたところで、急に前に行くポルロンソ
が歩みを止めた。

「……」

「どうしたんです、ポルロンソさん？」

「サイトくん」

「はい」

「君は良い人だな」

「え？」

ポルロンソは振り向かなかつたが、その声は心の底から感心してい
るようだった。

「おまけに君は忍耐強い。素晴らしい騎士だと言わせてもらおうよ」

「そ、そんなことは……」

「私に何か話があるんだろう？それもひどく言いだし辛いよつな」

「あ……」

「いいよ、聞こう」

サイトは思考が停止し、思わず唖った。

それ以外に何ができるだろう？

朝、出会ったときから今に至るまで、ポルロンソはじつくりとサイト・ローランドという男を観察していたということになる。

サイトはポルロンソという人間が実に慎重であることにも驚いていた。

多少言動に風変わりなところはあるものの、彼はアルザクス王国の騎士が自分を訪ねてきたという不自然な出来事、そしてその疑問に対する答えを、自分の中で注意深く、冷静に考えていたのだろう。そして、半日を共にした今、ポルロンソの中で結論が出たのだ。

『答えてよし』

英雄に直答を許された！

その事実だけで、サイトは全身の血が熱くなった気がして、大きく深呼吸をした。

額を拭くと、じつとりと汗ばんでいる。

話さなければならぬことはたくさんあるのだが、何から切り出せばいいのか、いざとなるとサイトは言葉に詰まってしまった。

朝一番でなら、うまく話せただろう。

この、ポルロンソという男のことを知る前であれば！

サイトは喉の奥からなんとか絞り出すように、言葉を紡いだ。

「ポルロンソさん……」

「うむ」

「魔王が、復活するんです」

言った！

ついに言ったぞ！

ポルロンソの背中が、それを聞いて少し動いたようだった。サイトは少し落ち着きを取り戻した。何かしら、感じるどころがあるのだ。やはり、ポルロンソにとってこれは他人事ではない。

「アルザクス王国はその情報をいち早く掴んで、対処策を考えています。そこで、あなたの名前が挙がりました」

「……」
「ポルロンソさん、我々に力を貸してください」

「あなたのことをアルザクスの騎士団が守ります。危険はもちろん無いとは言いませんが、僕はアルザクスの騎士団が世界で最高だと信じています。我々はあなたの忠実な剣となり盾となります。死をも厭わない覚悟があります」

「……」
ポルロンソは黙ったままだった。

「……」
サイトはもう一度、汗を拭った。心臓が普段の倍以上のスピードで脈打っているのだから。口の中もすっかり乾ききっていた。剣を何時間振り回していてもなかなかこうはならないのに！ポルロンソはずっと背中を向けている。今、どんな表情を浮かべているのだろう。サイトは大きく息を吸った。

「ポルロンソさん、お返事を……」
「……」

「ポルロンソさん……」

「……」

「世界の、大ピンチなんです！」

「……」

サイトの必死の言葉にもポルロンソは振り向かず、ただ、腰に手を当てた。

「ポルロンソさん、気が進まないのは分かります」

「……」

「たしかに、こんなお話は御迷惑でしょうが……」

「サイトくん」

「は、はいっ！」

「もしも、魔王が復活してしまったらどうするね？」

「た、倒します！かなわないまでも、全力で戦います！」

「……」

ポルロンソは天を仰いだ。

風が、ざわざわと高原の草を揺らしていく。

二人はしばらく黙ったままだった。

サイトにとっては、永遠とも思われるほど長い間だった。

「……まるで、『虎狩り』だ」

「え？」

ようやくポルロンソが口を開いた。

「人間はその肉を食べもしないのに虎を狩る。何故だろう？」

「？」

「虎が人間を襲うかもしれないからさ。虎が自分たちよりも鋭い爪

と牙を持っているから、人間は恐れ、怯え、それを何とか払拭するために虎を狩る。やられる前にやる。だが、虎は人間を食べないんだよ。美味しくないから」

サイトはポルロンソが何を言おうとしているのか、わかった気がした。

「魔人も、そうだと」

「まるで一緒ではないがね。もう少し長い目で動向を見守ってもいいのではないかな」

「僕らが、恐怖心から先走ったことをしようとしていると?」

「君が心から世界を守りたいという熱意を持っていることはわかる。だが、考えようによっては、魔王がいるほうがいいと思うこともあるかも知れないということさ」

「どういうことです?」

「魔人たちの王が生まれるということは、彼らの中にひとつの規範が生まれるかもしれないということだ。新たに魔王になる者が良識を持つ者であれば、魔人たちを統制し、人間たちと共存する道を模索していくかもしれない。魔人というのは皆が血に飢えた野獣ではない。中には、人間に対して好意的な者もいるかもしれないだろう?」

「……ッ!」

サイトは血が出るほど強く拳を握った。

ポルロンソの言いたいことも、十分に理解できる。

彼の言葉は確かに筋が通っている。

理解できる。

理解できるのだが、サイトは決して納得はできなかった。

「……僕はあなたを尊敬していますし、今だってそうです。でも、

それは樂觀が過ぎますよ！」

「……」

「ポルロンソさん」

「うむ」

「僕の……僕の父は魔人に殺されたんです！」

サイトは、血を吐くように叫んだ。

「強い、優しい父でした……尊敬していたんです」

今でも目を閉じれば、その姿が思い浮かぶ。

最後に見た、生きている父の姿だ。

丸太のような太い腕がサイトを抱き締め、熊のように大きな掌がサイトの頭を撫でた。

『サイト。偉くも、強くもなくいい。正しい人間になるんだぞ』

それは父が口癖のようにいつも語っていた言葉であり、サイトにとつては人生の道標ともなっている金言である。

サイトがその言葉に大きく頷くと、父は満足そうに微笑んで、もう一度、彼を抱き締めた。

そして、それが最後だった。

次に会った時には、父は四角い柩の中に綺麗に収まっていて、もう二度と笑わなかった。

その時サイトは、父の死があまりにも現実離れした出来事のように思えて、涙を流すことも忘れて呆然としていただけだった。

十年も前のことである。

「とある集落を襲った魔人の群れに一人で立ち向かって、相討ちに

なっただんです」

「そうか……それは……残念だったね」

「僕は……僕は魔人を憎みました。こんな理不尽があるのかと思いましたがよ……！」

「……」

「でも、そんな個人的な恨みは今、どうでもいいんです。僕は、僕はある悲しいことが繰り返されることだけは避けたいんです！」

「うむ……」

ポルロンソは考え込んでいるようだった。

サイトは、もどかしくなった。

何を悩むことがあるんだろう？

世界を救う力を持っているのに、何故それを使うことを躊躇うんだらう？

「それに、あなたはゴツテムを倒したじゃないですか！」

「うむ」

「それなら……！」

「あれは……私闘だった。私は君たちの考えているような英雄ではないんだ、サイトくん」

「え？」

「今の君のように世界を守るなどという大儀があつたわけでも、義憤に燃えての行動でもなかった。奴の行為を許してはおけない、奴を生かしてはおけないという、個人の醜い私怨で戦った。そして、倒したんだ」

振り向いたポルロンソの目は、ひどく悲しい色の光を帯びていた。サイトは、二の句が告げられなかった。

「ポ、ポルロンソさん……」

「幻滅しただろうね。すまないな、サイトくん。さて、お茶の時間を逃してしまうよ。先を急ごうじゃないか」
「……はい」

二人は、また山道を登り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3002g/>

ライトニングソード

2010年10月17日04時02分発行